

掲示板のことば

三宅香帆『なぜ働いていると本が読めないのか』

生きる

半身社会を

2024. 09

この言葉の前には、全身全霊をやめて、もしくは、全身全霊を称揚するのはやめて、という言葉が置かれています。

引用した本の著者である三宅さんは、サラリーマンが徹夜して無理をして資料を仕上げたこと、お母さんが日々自分を犠牲にして子育てをしていること、高校球児が恋愛せずに日焼け止めも塗らずに野球したこと、などなど日本に溢れている「全身全霊」を褒め称える社会をやめるべきだとおっしゃっているのです。

半身こそ理想だと、それが「働きながら本が読めない社会」からの脱却の道であるとおっしゃいます。なるほどそうだなあとと思います。

読書離れが言われて久しい感がありますが、決して時間がないわけではないのでしょう。スマホは見るわけですから。スマホを使ってゲームをしたり、YouTubeを観たり、ニュースを見たり、漫画を読んだりしているわけです。

でも、読書はしなくなりましたね。僕はまだかろうじて本を読みます。若い頃から歴史小説が好きで、吉川英治、山岡荘八、そして司馬遼太郎などのなが〜い小説を通勤時間や休憩時間はもちろん、家や喫茶店などで読んでいました。

三宅さんが言うには、現代は、必要な情報をピンポイントで獲得することができるので、読書はノイズだと感じられている、ということです。つまり雑音です。かつてはその雑音が好きだった。知らないことを知ることができるのは、その雑音にあったのです。いま雑音を楽しむ余裕がないのは、「全身全霊」信仰にあるのかもしれない。やめられるかは分かりませんが、称揚するのはやめてみよう。

半身で働きながら、本の読める社会をつくる、いいじゃありませんか。

真宗大谷派 光明寺住職 小林尚樹